

てなんねえぞい。」そういつてじゃれついたんだとお。嫁は好奇心にかられて「猫踊りかい、踊ってみせてくれい。」と日ごろかわいいがっていたので、そういつてみたんだとお。猫はニヤニヤないてうなづいたと。みるまに、手ぬぐいを姉様かぶりにし、前脚をたてて機のまわりをふしまわし面白く「猫の踊りじア猫の踊りじや」とピョンピョンはねたり、ひげづらでニタニタ笑いながら踊りあるいたんだとお。嫁は気味悪くなって、あとでそつと婿にそのことを話したんだとお。すると古猫は次の晩、機を織っていた嫁のところによつてきて、白ひげを逆かに立て、目をらんらん光らせて「やい嫁どん、こうなつては、わしは山へゆかにやならなくなつた。こう正体をみやふられては、おめいを生かしておく分にやいかねえ。」とうとうと魔性をあらわし、嫁ののどをかみ切つた。アツというまに狂い声をあげ助けをよぶ嫁をしり目に、一目さん山へ逃げこんでいったんだとお。猫は魔物だべい。

(四) 狐にかたきをとられた法印のはなし

むかしむかし、法印がおつたとお。山開きのためきゆうを背負い、装束もりりしくほら貝をふきたて、しやくつえをのつしのつしとたてて、山へむかつたんだとお。ところが、このほら貝のひびきに昼寝をしていた古狐はびっくりして、山道を一目散に逃ていったんだとお。やがてこの狐はこれをうらみに思い、必らず法印を困らせてやるべいと尾をさかさまにふりたて鬼火を燃し、霧をよび、山道をふさいでしまったんだとお。さて法印は明るい真昼だというのに、どうして霧深く暗くなつたか、何かけものの仕業かとぞくぞく寒気もして、一步も前へ進むことが出来なくなつたんだとお。いぶかしく思いながら、見ると一本の大本がそこになつていて、こずえの方が明るく見えたので、木によじ登つてあたりを見ようとしたんだとお。ところ